南アジア古典学 14 (2019), 323-335

シャーリカナータの文意論

九州大学　片岡　啓

1　文意理解は言葉に基づく

文の対象（vākyārtha）[1]の理解は言葉に基づくもの（śābda）でなければならない[2]．不可分の文という全体から出発するバルトリハリならば「文から文意が理解される」（文→文意）という単純なモデルを立てれば済む（PrP 377.12–16）．しかし，部分により構成される全体というモデルを立てるミーマーンサーにおいて話は単純ではない．文を構成する諸語（細かくは語も音素から構成される）から文意が理解されるモデルを工夫する必要がある．シャバラやクマーリラは,「諸語→諸語意→連関（文意）」という間接モデルを立てた（PrP 377.19–21, 383.3–9）．これにより「文意が言葉に基づくこと」が直截には主張しにくくなった．なぜなら文意たる連関は，諸語が表示した諸語意から直接には理解されるからである．諸語は間接的に原因となるに過ぎない（PrP 384.1–3）．あくまでも諸語の対象が，対象間にある連関を知らしめるのである．これに対してプラバーカラは,「諸語は［他語意と］連関した［語意］を［文意として］表示する」（諸語→他の語意と連関した語意）という直接モデルを提示することで，この至上命題を守ろうとした（Bṛh 384.2）．プラバーカラが導入した「連関したものの表示」（anvitābhidhāna）説の動機（そして利点）は,「文意理解が言葉に基づくものである」という命題の直截的な担保にある．

2　関係把握において学ばれたのは未連関語意ではなく既連関語意である

言葉は予め意味との関係を学んでおく必要がある．vyutpatti（関係把握・習得）である[3]．プラバーカラの着想において重要なのは，関係把握段階で学ばれたもの，すなわち，年長者達のやりとり（vṛddhavyavahāra）における挿入・削除（āvāpoddhāra）を通して観察者が取り出した語意が，未連関の（ananvita）自意それ自体（svārthamātra, svarūpa）ではなく，既連関の（anvita）語意であるということである（Bṛh 383.6–384.2）.「牛を連れてこい」といった年長者達のやりとりの対象は特殊だからである（Bṛh 397.1）．シャーリカナータの記述（PrP 378.17–18, 383.11–12, 384.13–15）を勘案すると次のようになる[4]．ま

[1] ミーマーンサー学派では，言葉の対象として客観的な実在（たとえば「牛」という語に対応する実在する普遍である牛性など）を考えているので，客観的な指示対象と別個に「意味」（Sinn）なるものを考えているわけではない．しかし，svārtha，padārtha，padārthāntara，vākyārtha をいちいち「［語］自身の対象」「語の対象」「他の〈語の対象〉」「文の対象」と訳すとなると，文意論では冗長を免れえない．したがって冗長回避のため，便宜的に「自意」「語意」「他語意」「文意」という簡潔な表現も用いる．すなわち，以下では「意」や「意味」は，いずれも客観的な対象を指す．

[2] シャーリカナータにおいて,「言葉に基づくもの」（śābda）という語は，文意理解と文意のいずれに対しても用いられている（PrP 394.2-4, 399.8; 401.12）．文の対象が言葉に基づくというのは，文の対象として客観的な実在を考えている以上，厳密には，言葉に基づいて認識されるいう意味でしかありえない．

[3] シャーリカナータ自身，Vam I 21 において，saṃbandhabodha=vyutpatti と表現している（PrP 413.12）．

[4] シャーリカナータの Vam の翻訳として，Avasthī 1979, Sarma 1987, Pandurangi 2004，研究として Sarma 1990 がある．

ず，自意（例：ただの連行）そのものではなく，他語意と連関した自意（例：牛の連行）が語と関係したものとして学ばれる．したがって，特定のものと連関した自意が語から理解されることになる（PrP 407.20–408.1）．つまり，習得の様々な体験の中で取り出されたものは，ただの連行ではなく，他語意と連関した連行である．関係把握段階においては，客体の側にある〈他語意と連関した連行〉という実際の連関に対応して語が挿入・削除により学ばれる．したがって，言語使用段階において文中の語「連れてこい」から理解される語意は，未連関の連行一般ではなく，他語意と連関した連行という〈連関したもの〉となる[5]．諸体験から抽出されたものが「連れてこい」という語から理解されるのだから，学ばれた通りのもの，すなわち,〈他語意と連関した連行〉が言語使用時においても理解される．このように，習得の対象を〈連関したもの〉とすることで，語の表示対象に連関という文意要素を予め組み込んでおくことが可能となる．またそれにより「諸語→連関したもの（文意）」という直接モデルの主張が可能となる．

3　シャバラ注の解釈方法

3.1　シャバラの記述：表示されたものの連関

シャバラによれば，諸語が各語意を表示（abhi-√dhā）し，次に，そうして表示された諸語意が文意を理解させる（gamayanti）．すなわち後にシャーリカナータが「表示されたものの連関」（abhihitānvaya）と呼ぶ（PrP 386.6）ことになるモデルがシャバラ自身の念頭に明瞭にある.（もちろん，プラバーカラやシャーリカナータはシャバラの「真意」は異なると主張する.）

> ŚBh ad 1.1.25 (391.7–392.2): padāni hi svaṃ svam artham abhidhāya nivṛttavyāpārāṇi. athedānīṃ padārthā avagatāḥ santo vākyārtham gamayanti.
>
> なぜなら――諸語は各自の対象を表示して働きを終える．さて次に［そうして］理解された諸語意が文意を理解させる――からである．

すなわち「諸語→諸語意→文意」という間接モデルが文意理解のモデルである．クマーリラも基本図式は同じである．いずれにおいても，第一段階の語による表示と第二段階の語意からの理解とを峻別し，文意理解は第二段階にあると考える．すなわち，文意たる連関は諸語意から理解されるとする．

語 1	→	語意 1	→	語意 1
				|
語 2	→	語意 2	→	語意 2
	表示		理解	

[5] このプラバーカラ派説に対して次のような批判があることをシャーリカナータは記している（PrP 381.7–11）．すなわち，X と連関したものにおいて X は無数にあるので連関も無数にある．結果として，X と連関したものは無数にあるので，関係把握は不可能となる．これへの回答が Vam I 8–9ab および解説で与えられる（PrP 384.13–21）．すなわち三付帯条件（upalakṣaṇa）を導入することで問題解決は可能となる.「期待され，適合し，近接したものと連関した対象を語は自［意］として理解させる」（PrP 384.9–10）とシャーリカナータはまとめている．また，後述するように，三付帯条件のみでなく一文性も X の特定化には必要となる．

シャバラやクマーリラにとっても，もちろん，ヴェーダ文の対象（文意）はヴェーダ文のみから理解されねばならない（ヴェーダ→文意）．つまりダルマは「ヴェーダ教令を認識手段とするもの」でなければならない（JS 1.1.2）．したがって，諸語意を介在させる間接モデルが，部分構成説との兼ね合いからくる妥協の産物であるのは明らかである．プラバーカラによる直接モデルの導入は，この問題を解決しようとするものである．

3.2 シャーリカナータから見たクマーリラの解釈

シャーリカナータによれば，評釈作者様（Vārttikakārapādās，つまりクマーリラ[6]）は，シャバラが言う第二段階の「理解させる」という働きを語意ではなく言葉に帰属させ，その働きを間接指示（lakṣaṇā）と同定することで，文意理解が「言葉に基づくもの」であることを担保しようとする.「そのことを述べている」（tad āhuḥ）という導入句でもってシャーリカナータは（明らかにクマーリラのものとして）次の詩節を引く[7].

> PrP 396.6: vākyārtho lakṣyamāṇo hi sarvatraiveti naḥ sthitiḥ/
>
> 残らず全てにおいて，文意は間接指示対象であるというのが我々の定説である．

この詩節を敷衍してシャーリカナータは「いっぽう評釈作者様は，全文意を間接指示に基づくものだと主張することで，諸語意に属するものとして〈連関理解に対する能力〉を想定することを排除する」と述べる[8]．この詩節は,「諸語→諸語意→文意」の第一段階を直接表示，第二段階を間接指示とすることで，後者も言葉の働きであることを担保しようとするものである．

語 1	→	語意 1	→	語意 1
				|
語 2	→	語意 2	→	語意 2
直接表示			間接指示	

シャバラ注やクマーリラの ŚV においては，文意が間接指示対象であることは明言されてはいない．むしろ，文意は明らかに諸語意（語の対象）に基づくものとされていた．語を聞かずとも対象群だけからでも対象間の連関が理解される場合があると彼らは考えている[9]．間接指示に言及する上の詩節が本当にクマーリラの *Bṛhaṭṭīkā* からのものなのかどうかはさておき，いずれにせよ，ŚV 以降の段階で，文意を「言葉に基づくもの」であることを担保しようとする意識がクマーリラあるいはバッタ派の中に起こったのは確かである．実際，クマーリラは，ŚV において「諸語は文意に対しても能力を離すことはない」と明言す

[6] シャーリカナータの言及，および，クマーリラの失われた著作については長い論争史がある．片岡 2011 の先行研究概観を参照.

[7] この半詩節は金沢 1991 に詳しく論じられる.

[8] PrP 395.24–396.1: vārttikakāra*pādās** tu lākṣaṇikān sarvavākyārthān icchantaḥ padārthānām anvayāvabodhaśaktikalpanāṃ nirākurvanti. *BHU 版の vārtikakāra*miśrās* を Chowkhamba 版（*Prakaraṇapañcikā nāma Prabhākaramatānusāri-Mīmāṃsādarśanam Mahāmahopādhyāya-Śrī-Śālikanāthamiśra-viracitam*. Ed. Mukunda Śāstrī. Benares: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1904）および写本（Kerala University, Manuscripts Library, No. C.2444C）に基づき訂正．Cf. 片岡 2011: 26–27, n. 56.

[9] シャーリカナータも「白い馬が走っている」に関するクマーリラの ŚV 詩節（ŚV vākya 358–359a）を引用し（PrP 392.15–17），この問題を詳細に論じる.

る（ŚV vākya 229）．シャーリカナータもその詩節を引用している（PrP 384.4–5）．少なくともシャーリカナータの目に映ったクマーリラは，間接モデルが抱える不都合を，間接指示という言葉の働きを導入することで乗り越えようとしている．

3.3　シャーリカナータから見たプラバーカラの解釈

シャーリカナータの捉えたバッタ派説では，文意である連関は語の直接表示対象ではなく間接指示対象である．いっぽう，連関したものを直接表示するというプラバーカラ派の解釈においては，連関した語意がそのまま文意であると考える（PrP 377.10–11）ので，文意は直接表示対象となる．これにより文意が「言葉に基づくもの」であることが直截に主張できることになる[10]．

語 1	→	語意 1	
		|	（連関）
語 2	→	語意 2	
直接表示			

3.4　プラバーカラによるシャバラ注の解釈方法

シャバラ自身は明らかに間接モデルを標榜する．したがって，直接モデルを標榜するプラバーカラは，自身の理解に沿ってシャバラ注を読み替える必要がある．その解釈方法として，プラバーカラは，相互連関したもの（vyatiṣakta）と相互連関（vyatiṣaṅga）との区別を導入する（Bṛh 386.2）．すなわち，連関した諸語意から連関が理解される過程（連関した諸語意→連関）に言及するものとしてシャバラ注の当該句後半を解釈する（Bṛh 394.10）．すなわち，第一段階として諸語から連関した諸語意が表示され，次に，第二段階として，連関した諸語意から連関が含意として理解される，という趣旨を述べるものとしてシャバラ注の当該句を読み替える．このように,「表示された［諸語意］の連関」（abhihitānvaya）と後に呼ばれることになるモデルを念頭に置いていたシャバラ注の当該箇所は，プラバーカラの巧妙な解釈により,「連関したものの表示」（anvitābhidhāna）へと読み替えられたのである．anvitābhidhāna という表現は，プラバーカラが初出（Bṛh 392.15）と思われる[11]．シャーリカナータは「連関は意味上（間接的に）把握されている」と表現する（PrP 410.12）．

バッタ派：	諸語	→	諸語意	→	文意
プラバーカラ派：	諸語	→	連関した語意	→	連関

[10] 語意 1 と連関した語意 2 と，語意 2 と連関した語意 1 というように，連関したものは多数となるが，主従関係に沿って諸語意を並べることで単一の主要素を目指すことになるので，文意は一つとなる（Vam I 3–5）．

[11] シャバラにおいて anvaya という表現は，連関という意味では一般的ではない．むしろ通常は肯定的随伴の意味で用いている．次の箇所は連関を意味するシャバラ注の用例として重要である．ŚBh ad 3.2.1: na hy ananvitaḥ padārtho bhavati vākyārthaḥ.「なぜなら未連関の語意は文意ではないからである.」　なお，厳密には，anu には従属の意味があるので，anvaya は従が主に従属的に連関していくという主従関係をも含んだ一方向の連関である．その意味で相互連関を意味する vyatiṣaṅga と全同ではない．しかし従属的連関ということを考慮する必要がない文脈においては煩雑なので単に「連関」と訳す．実際，プラバーカラやシャーリカナータにおいては parasparānvaya という表現も見られる（Bṛh 382.9, 399.8; PrP 377.2–3, 393.13）ので，必ずしも方向性を意識しない用例もあることが分かる．

3.5　プラバーカラ派説の優位性：語の能力の想定

3.5.1　バッタ派の三つの能力想定

シャーリカナータの目から見ると，バッタ派では，三つの能力想定が必要となる．

1. 諸語が持つ直接表示能力[12]
2. 諸語意が連関を理解させる能力を［諸語意に］付与する［諸語の］能力[13]
3. 諸語意が連関を理解させる能力[14]

諸語意から文意が理解される過程があくまでも語に裏付けられたものであることを担保するために，諸語意の能力 3 を付与する能力 2 を語の上に別個に立てる必要が出てくるのである．

能力 1 ＋ 2　　能力 3
　|　　|
諸語　—1 →　未連関の語意　—3 →　連関（文意）

3.5.2　能力想定の最小化

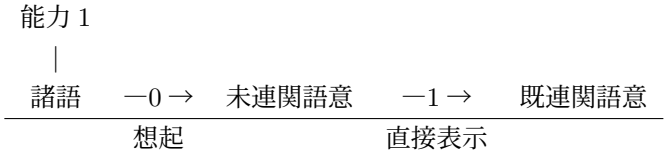
語が直接表示能力を持つことについて，バッタ派とプラバーカラ派との間に異論はない（PrP 400.15, Ṛju 385.14）．問題は，文意（連関あるいは連関した語意）に対する語の能力をどのように確保するかである．バッタ派モデルにおいても，語が持つ語意表示能力が，連関した語意にまで到達すると考えれば，別個に間接指示能力を想定する必要はなくなる．すなわち，未連関語意に対して働く語の能力の上に，既連関語意（文意）の連関という部分に対して働く付加部分（atireka）を認めて（Ṛju 385.14），両者をまとめて語の一つの表示能力とすれば（言い換えれば，語の直接表示能力の中に，連関に対する間接指示能力を予め組み込んでしまえば），能力想定は一つで済む．すなわち，バッタ派のモデルは能力想定最小化の観点から次のように簡素化できる．

付加分 1’
　|
能力 1
　|
諸語　—1 →　未連関語意　—1’ →　既連関語意（文意）

3.5.3　一つの能力想定

プラバーカラ派のモデルにおいては，後述するように，未連関の語意に対して語の能力を想定する必要はなく，その過程では，想起があるだけである．したがって，語の直接表示能力（ただしそれはバッタ派とは違って，連関したものへの直接表示能力である）一つで文意理解が説明可能となる．

[12] PrP 401.16: ekā tāvat padānām abhidhāyakatvaśaktiḥ.
[13] PrP 401.16–17: aparā ca padārthagatānvayabodhanaśaktyādhānaśaktiḥ.
[14] PrP 401.17: padārthānāṃ cānvayajñāpanaśaktiḥ.

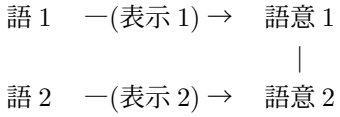


なお，プラバーカラ派において，語が表示する語意は，あくまでも，関係把握段階で学ばれた何らかのものと連関した語意である．その中に未連関語意も含まれているので，未連関語意を想起対象だと考える（Ṛju 385.19–20, PrP 405.26）．この問題を次に扱う．

4　未連関語意想起

4.1　シャーリカナータが予想するバッタ派からの批判：相互依存

「［他語意と］連関した語意を表示する」というプラバーカラ派説においては，相互依存の過失が生じるという批判のあることをシャーリカナータは記している（PrP 383.3, Ṛju 385.16）．すなわち,「牛を」「連れてこい」という二語において,「牛を」は，連行と連関した牛性を表示 1 し,「連れてこい」は牛性と連関した連行を表示 2 する．その場合，表示 1 は表示 2 を必要とし，表示 2 は表示 1 を必要とするので，二つの表示の間で相互依存となる（表示 1 ⇆ 表示 2）．



4.2　シャーリカナータによる解決：未連関語意想起の導入

表示の前段階で，文中の他語意と未連関の語意が予め単独の語から想起させられているとすれば，相互依存の過失は回避可能である（PrP 406.12–13, Ṛju 385.21–22）．すなわち,「牛を」「連れてこい」から，それぞれ，連行と未連関の牛性と，牛性と未連関の連行とが想起される．次に，そうして各語から想起された連行と連関した牛性を「牛」は表示し，同様に，そうして想起された牛性と連関した連行を「連れてこい」は表示する．シャーリカナータは，想起という段階を導入することで，相互依存の過失を回避する．プラバーカラ以降のある時点で,「他語意と連関した語意を語が表示する」という説に対して，相互依存に関してバッタ派からの批判があったものと推測される．

後述するように，表示対象は，関係把握時に学んだように，期待・近接・適合性という付帯条件を満たした何らかのものと連関したものである．連関したものが習得されるという発想こそ，習得を重視したプラバーカラの重要な出発点であった．シャーリカナータも，その基本線を遵守する．すなわち,「牛」の表示対象は〈三付帯条件を満たした何らかの Y と連関した牛性〉であり,「連れてこい」の表示対象は〈三付帯条件を満たした何らかの X と連関した連行〉である．ただし，シャーリカナータによれば，未連関語意は表示対象の中に含まれており（PrP 405.26: antargati），関係想起の際に同時に想起させられているはずなので，これにより上の相互依存の問題は解決可能となる．彼は次のように説明する．

PrP 402.2–5: yas tv anapabhraṣṭasaṃbandhagrahaṇasaṃskāraḥ, sa padaṃ śrutvā nūnaṃ tāvad idaṃ smarati—“idam asyākāṅkṣitasaṃnihitayogyapratiyogyanvitasya vācakam” iti. evaṃ ca smaratā smṛtam evānanvitam api svarūpam anvayabhājām.

いっぽう，関係把握の潜在印象が抜け落ちてない人は，語を聞いて，まず次のように想起するはずである——「これ（語）は，これ——期待され・近接し・適合した連関項が連関したもの——を表示する」と．そして，このように想起する人は，連関を持つ［諸語意］の中にある未連関の［語意］それ自体をも想起したことになる．

すなわち,「牛」が表示する三付帯条件を満たしたものと連関した牛には，牛性そのものも含まれているので，牛性そのものの想起もあるはずだというのがシャーリカナータの解決方法である．彼は，プラバーカラの基本路線を崩すことなくバッタ派からの批判に答えたと見なすことができる．モデルを具体例に即して描くと次のようになる．

「牛」	→	牛性	→	連行と連関した牛性
				|
「連」	→	連行	→	牛と連関した連行
		想起対象		表示対象

表示された何らかのものと連関した語意の中に，語意そのもの（牛性そのものや連行そのもの）も含まれているというのがシャーリカナータの言わんとすることである.「なぜなら連関した［語意］が［語により］表示されていても,［未連関の語意］それ自体がなくなるわけではないからである」（Ṛju 385.19–20: anvite ’pi hy abhidhīyamāne svarūpaṃ nāpaity eva）とシャーリカナータは記す．連行は，単独の語から想起されたその段階では未だ想起対象でしかない．それが，後述する三付帯条件や他語との一文性を考慮することで，特殊と連関した連行として表示されることになる．Vam I 12–15 の記述だけを見るなら，バッタ派の二段階説に限りなく近づいたモデルをシャーリカナータは描いていることになる．

語 1	→	未連関語意 1	→	既連関語意 1
				|
語 2	→	未連関語意 2	→	既連関語意 2
		想起対象		表示対象

4.3 バッタ派説との比較

未連関語意の想起を間に挟むという点に注目すると，シャーリカナータの定説は，第一段階と第二段階を実質的に立てることになるので，バッタ派説に近づいてしまうことになる．ただしプラバーカラ派説では，他語意と未連関の語意に対して，表示の代わりに想起を導入するので，語の能力を別個に立てる必要がない．したがって，バッタ派よりも想定は少なくて済む[15].

[15]両説の相似・差異については藤井 1999 に論じられる．

	語 1	→	未連関語意 1	→	既連関語意 1
					|
	語 2	→	未連関語意 2	→	既連関語意 2
B派			直接表示対象		間接指示対象
P派			想起対象		直接表示対象

5　X との連関：X は一般か特殊か？

表示対象となる〈[他語意と] 連関した [自意]〉において，他語意が一般者（sāmānya）なのか特殊（viśeṣa）なのか，という問いがプラバーカラ派内にあったことがシャーリカナータの記述から窺える（PrP 412.7–11, Ṛju 384.4–5）．ここでいう特殊とは実際の行為の対象となりうる個物のことである．つまり,「牛を連れてこい」と言われた時に実際に連行されうる個物としての特定の牛のことである．

5.1　シャーリカナータが予想するプラバーカラ派内の敵説：一般者と連関したもの

一般者とする場合には，連関項である他語意をわざわざ立てる意味はない（Ṛju 384.5）．一般者と連関することは〈連関したもの〉にとっては自ずから成り立っているからである．すなわち，一般者 X と連関した連行を「連れてこい」が想起させると主張する場合，行為対象となる何らかのものという一般者が連関項としてあるのは自明である．したがって，一般者と連関した語意を考える必要はない．

「牛」	→	牛性	→	一般者 Y と連関した牛 1
				|
「連」	→	連行	→	一般者 X と連関した連行 1
		想起対象		表示対象

5.2　シャーリカナータの自説：特殊と連関したもの

〈他語意と連関した語意〉の表示において，連関項たる他語意として与えられるべきは，特定化された特殊（すなわち個物）でなければならない（PrP 412.13–14）．すなわち，特定の牛（個物）の連行が,「牛を連れてこい」という文における「連れてこい」の表示対象でなければならない．関係把握に基づいて「連れてこい」という語から理解される〈三付帯条件を満たした X と連関した連行一般〉は，後述する一文性の過程を経ることで，特定の牛と連関した連行となって表示される（PrP 412.15–16）．

「牛」	→	牛性	→	特定の連行と連関した牛 1
				|
「連」	→	連行	→	特定の牛と連関した連行 1
		想起対象		表示対象

プラバーカラ派のモデルにおいても，バッタ派のように二段階を設けることは不可避である．したがって，プラバーカラ派内でも，一般と特殊の二段階を意識せざるを得なくなったはずである．連関項を一般者とする見解は，恐らく，この第一段階を特に意識したものであったと思われる．すなわち，第一段階の想起によって与えられる X や Y が一般者であることから，第二段階においても連関したものの連関項を一般者としたのである．しかし，年長者達のやりとりという実際行為の対象はあくまでも個物という特殊でなければならず，それこそが文中の語の表示対象だというのがプラバーカラ説の核心である．第二段階における連関項を一般者とする見解は，プラバーカラの卓見を根本から否定する危険性をはらむ．シャーリカナータが連関項を特殊としたのは，プラバーカラ説の肝を守るためにも当然の解決方法であると評価できる．

6　付帯条件：期待・近接・適合性

6.1　プラバーカラ派の場合

連関項となる X や Y は，期待され（ākāṅkṣita），近接し（saṃnihita），適合したもの（yogya）である．このような三つの付帯条件（upādhi, upalakṣaṇa）[16]を満たしたものと連関したものを語は表示する（PrP 384.13–14, 390.18–19, Ṛju 384.24–25）．

			付帯条件	
			↓	
「牛」	→	牛性	→	特定の連行と連関した牛 1
				|
「連」	→	連行	→	特定の牛と連関した連行 1
		想起対象		表示対象

シャーリカナータは,「期待・近接により得られた〈適合性のある他［語］意〉と連関した自意を諸語は述べるというように語意習得に依拠する場合には無数性・逸脱による過失は何もない」[17],「諸語は，期待・近接により思い起こさせられた〈連関適合性のある他［語］意〉と連関した自意を表示する，というように語意習得に依拠する場合には，いかなる不都合もない」[18]と表現する．

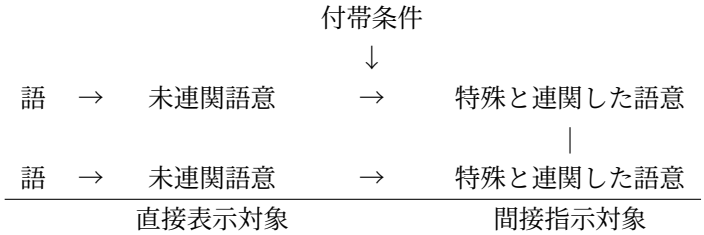
6.2　バッタ派の場合

バッタ派では，付帯条件は，語意が連関する前に初めて働く．

[16]水晶を赤く染める「傍らに置かれたもの」（upādhi）としての赤い花や，偶々デーヴァダッタの家の目印（upalakṣaṇa）として用いられる屋根の上のカラスと同様に，可変項 X や Y を特定化する三つの条件は，場面に応じて変化するので，その X や Y にとっては外来的・偶然的・非本質的な条件である．

[17]PrP 384.13–15 (Vam I 8–9ab): ākāṅkṣāsaṃnidhiprāptayogyārthāntarasaṃgatān/ svārthān āhuḥ padānīti vyutpattiḥ saṃśritā yadā// ānantyavyabhicārābhyāṃ tadā doṣo na kaścana/

[18]Ṛju 384.24–25: ākāṅkṣāsaṃnidhānopasthāpitānvayayogyārthāntarānvitasvārthābhidhāyīni padānīti vyutpattiparigrahe na kiṃcid anupapannam.

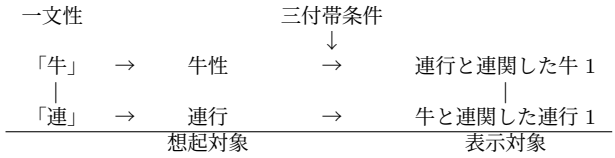


いっぽう，プラバーカラ派では，三付帯条件による特殊化作用は，関係把握段階で既に与えられている．したがって語が表示する対象は，バッタ派の言うような素の一般者（例：連行一般）ではなく，既に限定の加わった対象（例：三付帯条件を満たした X と連関した連行）である．

7　一文性

なお,「牛を連れてこい」の「連れてこい」から理解される〈X と連関した連行〉における関係項 X は，昔に経験したもので三付帯条件を満たしたものなら牛でも馬でも何でも良いのではないか，という反論が起こりうる．連行と結びついた多くのものが想起可能だからである．同様に,「牛」から理解される〈Y と連関した牛〉において想起される Y は，昔に経験したもので三付帯条件を満たしたものなら連行でも乳搾りでも何でも良いのではないか，という反論が可能である[19].

シャーリカナータはこのような反論を一文性という観点から排斥する．すなわち，馬と連関した連行を「連れてこい」が表示し，また，乳搾りと連関した牛を「牛」が表示する場合には，同一文中にある「牛を」「連れてこい」という二語の一文性（ekavākyatā）が損なわれ，文分裂となってしまう．したがって，文分裂を回避し一文性を確保するために,（文外の要素を補足しなければならない例外的な場合を除けば）通常は，同一文中から確保される他語意と連関した語意が表示される（PrP 408.4–8）.



シャーリカナータは,「全語群は聞かれると，未連関語意を想起させ，解釈原則（一文性）によって完成された言明個体を持つことで，後から文意を知らしめる」と表現する[20]．ここで言う解釈原則とは一文性のことである（PrP 409.4）．解釈原則によって言明個体が完成されない限りにおいて，語は文意を理解させない（PrP 404.3–4）．世間に基盤を置く解釈原則によって,「こちらが規定対象，こちらが再言対象」「こちらが主要素，こちらが従属要素」「こちらが表示意図された対象，こちらは表示意図されていない対象」というように,

[19] PrP 406.21–407.5．なおシャーリカナータが用いる例は異なるので,「牛を連れてこい」に沿う例に適宜改めた.

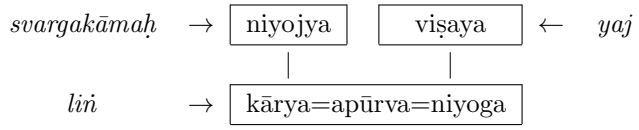
[20] PrP 401.23–24 (Vam I 12): padajātaṃ śrutaṃ sarvaṃ smāritānanvitārthakam/ nyāyasaṃpāditavyakti paścād vākyārthabodhakam//. Cf. Ṛju 385.17–18: yāvanti padāni vākye tāvanti śrutvā nyāyānusāreṇa vacanavyaktiviśeṣam avasāyārtho 'vagamyate.「文中の全ての語を聞いてから解釈原則に沿って，個々の言明個体を確定して［文］意が理解される.」

言明個体（いわば文の深層構造）が確定されることで初めて，文意理解が可能となる（PrP 404.4–7）.

8　結論

語から文意に至る過程は，一般から特殊へと至る過程でもある．その過程で，語による表示の中にどこまで特殊化の過程を組み込んでおくのか．バッタ派では，直接表示で一般へ，間接指示で特殊へ，というようにシンプルに二段階を考えた．未連関語意が表示され，その次の段階で，語意間の連関が理解される．また，関係把握という習得で学ばれるのはあくまでもただの普遍という一般者だとした．いっぽう，プラバーカラ派では，文意が言葉に基づくものであるという至上命題を守るために，直接表示で一気に特殊（文意）に至るという一足飛びの過程を考えた．すなわち文中の語が表示するのは，年長者達のやりとりから学んだ通り，連関したものである．しかし，相互依存の過失が生じることになり，それを回避するために，バッタ派と同様の未連関の語意の想起段階を考えねばならなくなった．結果として，バッタ派のいう一般者の過程を完全に省略することはできず，バッタ派に近似したモデルを提示することになった．そこでは，バッタ派の言う未連関語意直接表示の過程に代えて，未連関語意想起という過程を考えることになった．しかし，シャーリカナータは，表示された既連関語意の中に未連関語意も含まれているという説明方法によって，プラバーカラの基本的発想を守った．すなわち，三付帯条件を満たした連関項と連関した語意が表示される時，そこに同時に語意そのものも含まれているという説明で相互依存の批判に答えた．また，ここでは，想起を導入することで語の能力想定が減っているという利点がある．すなわち，バッタ派に比してプラバーカラ派のモデルは簡潔である．さらに，他と連関したものを表示するという場合の他が一般者か特殊かというプラバーカラ派内の問いに対しては，シャーリカナータは特殊説を採用した．

以上によりプラバーカラ派説においては，限定された主要素たる指令（niyoga）――それは為されねばならないもの（kārya）であり，またヴェーダ以外の他の認識手段からは知られないという意味で新たなもの（apūrva）である――が文意として語から直接に表示されるというモデルが完成した．すなわち「祭るべし」における願望法動詞語尾の liṅ は直接に，被指令者（niyojya）である有資格者（adhikārin）と指令対象（viṣaya）である祭式に限定された指令（niyoga）を表示する．



いっぽうクマーリラの「対象が持つ生じさせる働き」（arthabhāvanā）説では命令（vidhi）が限定された主要素の図式の中に入ってこない．言い換えると，クマーリラの言う命令の本質たる言葉の持つ生じさせる働き（śabdabhāvanā）は，祭式構造の核となる〈対象の持つ生じさせる働き〉の図式の中に入ってこない．すなわち，実現対象（sādhya），実現手段（sādhana），執行細目（itikartavyatā）という三要件からなる〈対象が持つ生じさせる働き〉（arthabhāvanā）の構造の域外にある．クマーリラは，対象が持つ生じさせる働きとは別に言葉が持つ生じさせる働きを立てた上で，言葉が持つ生じさせる働きの実現対象と

して，対象が持つ生じさせる働き（すなわち人の努力）を組み込むことで問題を解決しようとした．バッタ派において実現されるべき主要素は天界等の果報である．その生成力をたどっていくことで根源として命令（vidhi），すなわち，言葉が持つ生じさせる働きに行き当たる．

		yaj		
		↓		
sādhana		sādhana		
|		|		
śabdabhāvanā	⇒	arthabhāvanā	⇒	phala
↑		↑		↑
liṅ		*ākhyāta*		*svargakāmaḥ*

いっぽうプラバーカラ派における指令（niyoga）は，anvitābhidhāna 説では主要素として容易に位置付けることができる．指令の全体構造を包括的に，しかも，言葉に直接に基づくものとして簡潔に説明することができるのである．シャーリカナータ自身が Vam I の冒頭（PrP 376.5–6）で bhāvanā と apūrva の両者を文意として立てるプラバーカラ派内部の異説に注意を喚起し，apūrva だけが文意であることを自説として強調したように，バッタ派の bhāvanā 概念から独立して niyoga だけで全体構造を説明することが anvitābhidhāna 説により可能となったのである．

略号表および参照文献

一次資料

Vākyārthamātṛkā

Vam　See PrP.

Ṛjuvimalā

Ṛju　See Bṛh.

Jaiminisūtra

JS　See Bṛh.

Prakaraṇapañcikā

PrP　*Prakaraṇa Pañcikā of Śalikanātha Miśra with the Nyāya-siddhi.* Ed. A. Subrahmaṇya Śāstrī. Varanasi: Banaras Hindu University, 1961.

Bṛhatī

Bṛh　*Bṛhatī of Prabhākara Miśra with the Ṛjuvimalā Pañcikā of Śālikanātha*. Part I. Ed. S.K. Rāmanātha Śāstrī. Madras: University of Madras, 1934.

Śābarabhāṣya

ŚBh　See Bṛh.

ms. A manuscript preserved in the Tanjore Maharaja Serfoji's Sarasvati Mahal Library, Thanjavur, No. 6757 (B.L.2083). Paper. Devanāgarī script. Incomplete. 165 folios. Size 24 × 11 cm. Undated.

Ślokavārttika

ŚV *Ślokavārttika of Śrī Kumārila Bhaṭṭa.* Ed. Swāmī Dvārikadāsa Śāstrī. Varanasi: Tara Publications, 1978.

二次文献

Avasthī, Brahmamitra

1979 *Śālikanāthakṛta Vākyārthamātṛkā-vṛtti, Dīpikā Hindī Vyākhyā sahita.* Dillī: Indu Prakāśan.

金沢　篤（Kanazawa, Atsushi）

1991 「クマーリラの文章義間接表示説——『ブリハット・ティーカー』のものと考えられる半詩節について——」, 『東洋學報』72-3/4, 53–79.

片岡　啓（Kataoka, Kei）

2011 『ミーマーンサー研究序説』, 福岡：九州大学出版.

藤井 隆道（Fujii, Takamichi）

1999 「Śālikanātha の anvitābhidhāna 論——想起と意味表示——」,『印度学仏教学研究』47-2, 971(54)–969(56).

Pandurangi, Krishnacharya T.

2004 *Prakaraṇapañcikā of Śālikanātha, with an Exposition in English.* New Delhi: Indian Council of Philosophical Research.

Sarma, Rajendra Nath

1987 *The Vākyārthamātṛkā of Śālikanātha Miśra with his own Vṛtti.* Delhi: Sri Satguru Publications.

1990 *Verbal Knowledge in Prābhākara-Mīmāṁsā.* Delhi: Sri Satguru Publications.

＜キーワード＞ Śālikanātha, Vākyārthamātṛkā, vākya, anvitābhidhāna, abhihitānvaya

（九州大学大学院准教授，博士（文学））